鑑真渡日と唐代道教

王　　勇

Jianzhen's Arrival in Japan and Tang Era's Taoism

WANG Yong

There are already many researches about Jianzhen's arrival in Japan. Therefore, this paper described his motives for going to Japan as being related to Taoism in the Tang era. Early return of Japanese dispatched priests and Jianzhen and the others' obsessive passion for going to Japan is due to the Chinese circumstances which prosperity of Taoism reached its peak in the period of Xuanzong, and as well as Japanese circumstances, "Japanese emperor did not worship principles of Taoist priest". There were no evidence that Tang era's Taoism were taken into Japan, as a religious community which had facilities, officers, and organizations; however, Taoism among the Tang cultural things which are mixed into rituals, folk beliefs, and annual events would be brought to Japan by various routes n the era of Japanese envoy to the Tang Dynasty.

キーワード：鑑真、遣唐使、道教、井真成、吉備真備、泰山府君

一、遣唐使の墓誌から

2004年10月、西安市にある西北大学の発表によれば、同大学博物館の所蔵品に遣唐使の墓誌が見つかり、不況が長引く古代史学界に久々と活気をもたらした。

この珍しくかつ貴重な墓誌は多くの情報を伝えてくれるはずで、今後さまざまな角度から研究されるだろう。たとえば、墓誌の主は「井真成」とあるが、「井」は言うまでもなく日本の二字姓を中国風に直したと考えられ、東野治之氏は「葛井」と推測し、鈴木靖民氏は「井上」を当てているなど、すでに諸説に分かれている模様である。

発見当時、各紙の関連記事に目を通すと、まだまだ情報が不十分だったため、誤報と思われる記事もまま見られる。たとえば、墓誌は171文字あると報道されているが、朝日新聞（10月11日）の掲げた銘文は169文字、産経新聞（10月11日）は159文字しかなかった。また産経新聞や毎日新聞のように墓誌の文字を篆書としたのも、明らかに間違っていると言わざるを得ない。

墓誌の内容を簡単に紹介すると、井真成という日本人は唐に渡り、生まれつき才能に富んだのみならず、礼儀正しく、勉学に熱心だったのだが、開元二十二年（734）正月にわずか36歳で亡くなった。時の玄宗皇帝はその死を悼み、「尚衣奉御」という官位を追贈して、国費で万年県滻水あたりに葬らせた。

わたしは墓誌が公開される前から、共同通信社から取材を受けており、そしてまた墓誌が公開されてからは住吉大社において関連の講演を行ない、私見の一部は産経新聞と中外日報などに紹介されているが、いくつか見落とせないものがある。

たとえば、日本の各紙であまり取り上げられなかった墓誌の蓋に「贈尚衣奉御井府君墓誌之銘」の12文字が４行に刻まれている。墓誌といえば、蓋と底の二段組になるのだが、蓋に刻まれた文字を題（あるいは額）といい、底に刻まれた文字を誌（または銘）と称する。そして、井真成の場合は、題の12文字は篆書で刻まれ、誌の171文字は楷書で彫られている。

ここでは、題にある「府君」という表現に注目したい。府君とは郡相や太守の尊称として漢代から使われているが、墓誌などでは故人に対して用いられることが多い。その意味がさらに広がって、神々の敬称にも付けられるようになるのである。たとえば、唐の王度『古鏡記』に「某はこれ華山府君廟前の長松下の千歳老狸なり」とあるのはその例にあたる。日本では「府君」と言えば、「泰山府君」の略称と理解されるのは普通であろう。五岳の一つである東岳泰山は、天国と冥府を往来する通路、または人間の生と死を司る場所として崇められる霊山で、道教的な色彩は濃厚である。

死者の姓に「府君」をつけるのは、道教的な発想によるものとは言い切れないが、井真成の場合は、道教が隆盛を極めた玄宗期に入唐しており、その人物を考察する際にやはり道教的な視点は逃せない。たとえば墓誌を見ると、「素車曉引、丹旐行哀」とあるように、葬式はたぶん道教式によって執り行われたと思われる[1)]。井真成は阿部仲麻呂や吉備真備などとともに、前回の遣唐使の時つまり717年に入唐したとすれば、17年間も唐に滞在したことになり、すっかり道教文化に染まっていたはずである。

井真成は天平期の遣唐使が帰国する直前に亡くなったので、みずから道教文化を日本にもたらすことはなかったが、同年の秋に帰国した吉備真備が例の「泰山府君」の信仰を日本に持ち帰ったと伝えられているのも、偶然なことではなかろう。

ところで、本稿は井真成墓誌と道教の関連を論じようとするものではないが、理解に苦しむ鑑真渡日の動機を詮索するときに、井真成や吉備真備とほぼ同時代を生きていた人間として、道教がきわめて盛んだった玄宗皇帝の治世という時代背景を視野に入れなければならないと考えるのである。

二、鑑真来日の動機

鑑真来日の動機について、これまでにさまざまな仮説が唱えられてきたが、12年間にわたって、古今東西の歴史に類例の少ない大苦難行を断行してみせた鑑真の異常なほどの執念に、じつに不可解なものがある。『唐大和上東征伝』や『延暦僧録』などによれば、渡海中に36人があいついで死亡し、280人ぐらいが途中ながら脱退してしまい、最初から最後まで鑑真に付き添ったのは、唐人と日本人がそれぞれ一人だけだったということがわかる[2)]。

1）中国における伝統的な葬式は古来より土葬を基本として行なわれ、道教的色彩が濃厚であったが、仏教とともに火葬が導入されてからも道教的な要素が依然として温存されている。

2）『延暦僧録』の思託伝に「過海を経労して十二年を得たり。四度も舟を造り、五廻も海に入りき。退心する道俗は

したがって「鑑真はなぜそこまで日本に渡りたがったのか」という疑問は、多くの研究者がそれを共有している。これまでに、日本では日本史に立脚した「留学僧慫慂説」や「聖徳太子敬慕説」などが唱えられてきたし、また一部の研究者は中国の政治情勢と社会背景にも目を配って、「鑑真スパイ説」や「鑑真亡命説」などの論を展開してきた。まず、これらの諸説について簡単に検討してみよう。

仏教史研究の大家である小野勝年氏は「わが国から派遣された栄叡や普照らの留学僧の熱誠のこもった招請運動によって大いに動かされたこと」を鑑真来日の動機に結びつけている[3)]。

たしかに留学僧の存在を無視できないことは、鑑真が栄叡の死を「哀慟悲切」したことからも推測できるが、ただしそれが渡日の動機になったかどうかとは別問題である。一回目の渡航には日本僧の玄朗・玄法・普照・栄叡の四名が加わっていたが、それが渤海僧如海[4)]の誣告で挫折した時、玄朗と玄法があっさり脱退した。さらに栄叡は５回目の渡海で亡くなり、普照もこれで帰国を諦めたらしく一行から脱退して、独り明州へ向かったのである。６回目の渡航を決意したとき、鑑真の身辺に日本人僧が一人もいなかった事実は、留学僧らの情熱が鑑真の冒険を根本からささえたという説を支持しないわけである。

それと関連して、遣唐使大使藤原清河らがわざわざ揚州に下り、延光寺において鑑真を懇請した行動こそ、六回目の渡航を決定づけた原因だったとの見方もある。しかし、遣唐使は鑑真の来日を誘って乗船させてはいたものの、唐政府が鑑真らの出国を厳しく追及する可能性があることを知ると、蘇州の港で全員を下船させてしまった。鑑真らが来日できたのは、それを見かねていた副使の大伴古麻呂が独断で一行を自分の船に収容したからだ。したがって、鑑真渡日の執念をささえたものを、公的な遣唐使以外に求めなければならない。

小野勝年氏はまた「日本に仏法を興隆せしめ、それによって政教一致の理想国家を実現せんとした」聖徳太子が「鑑真の心を惹いた」とも述べている[5)]。この「聖徳太子敬慕説」は福井康順氏をはじめ、一流の仏教研究者に支持されているが、根拠とされる鑑真と栄叡の会話を見るかぎり、渡日前の鑑真は中国の慧思が日本の王子（王）に生まれ変わった伝説は聞いていたものの、聖徳太子その人の存在は知らなかったはずである[6)]。「聖徳太子慧思後身説」の成立に、来日後の鑑真僧団がかかわっていたとして

二百余人、終亡する道俗は三十六人なり」とあり、また同書の普照伝には「前後して終亡するのは三十六人、退心するのは二百八十余り、ただ普照・鑑真・思託のみ到るをもって期と為す」と述べられている。

3）小野勝年「鑑真とその周辺」、『仏教芸術』第54号、1964年４月。

4）如海の国籍について、『唐大和上東征伝』では「高麗」とあるが、８世紀の半ばに「高麗」は存在していないため、「新羅」の誤りではないかとの指摘がある。筆者は「新羅」よりも「渤海」の可能性が高いと判断する。

5）小野勝年「鑑真とその周辺」、『仏教芸術』第54号、1964年４月。

6）天宝元年（742）十月、栄叡らは大明寺に鑑真を尋ねて、問答を交わした。栄叡らは「仏法東流して日本国に伝わっている。しかし、その法があるが、伝法する人はいない。本国にむかし聖徳太子がいて、二百年の後に聖教が日本に興ると予言した。今はこの時期に当たっている」といって、鑑真の渡日を請願したところ、鑑真は次のように「むかし聞いた話だが、南岳の慧思が亡くなってから倭国の王子に託生し、仏法を大いに興隆させ、衆生を救済しているそうだ。また、日本の長屋王は仏法を崇敬して千枚の袈裟を造り、唐の大徳高僧に施したとも聞いている。その袈裟の縁の上には山川異域、風月同天、寄諸仏子、共結来縁という偈句が刺繍されている。これらから考えれば、日本はまことに仏法興隆に有縁の国である」答えた。この問答記事には、鑑真東渡の動機を示唆する重要な内容が

も、それを来日の動機とするのに無理があるように思わる。

三、鑑真スパイ説

以上のように、鑑真来日の動機をめぐって諸説紛々という状態であるが、推測が変な方向へと向かうと、「鑑真は日本に亡命してきた」とか「鑑真は唐のスパイだった」とかいう勇み足の議論もまた現われてくる。

まず「亡命説」について見てみよう。小野勝年氏は中国側の事情にも視線をむけ、「政治·社会·文化·宗教のあらゆる面で、はなはだしい変化が起こる」という「安史の乱」の前夜にあたり、「旧い世界に見切りをつけた鑑真は、新天地の開拓に光明を見出したのではなかったか」と推論した[7)]。

つまり、鑑真は「安史の乱」の勃発を予見して、衰えつつある祖国を「旧い世界」として見捨てて、日本に活路を求めて海をわたったという主旨の推測である。このような見解は、鑑真の渡日動機を論じる関連の著作や論文によくみられる。たとえば、鑑真像を凝視して、「深い景仰の心」を抱いた東山魁夷画伯は次のように述べる。

> 当時の唐朝の社会は、隆盛を越えて、爛熟と頽廃へ向うきざしが見えていた。（中略）和上の性格から見れば、唐の世は魅力あるものではなくなっていたはずである。いや、絶望を感じていられたのではないだろうか。そこへ、新しく興った仏教国家としての日本から、和上への渡航の招請があった。和上にとって、それは大きな新生への啓示として響いたにちがいない[8)]。

天宝十四載（755）に安禄山と史思明によって引き起こされた反乱いわゆる「安史の乱」を、その勃発の13年前に鑑真がすでに予見して、栄叡らの招請に応じたということは、とうてい考えられない。そして唐朝衰弱説よりさらに一歩進めば、鑑真亡命説につながる。つまり、「鑑真は大乱の勃発を予測して、王羲之父子の法帖のような無双の秘宝をたずさえて亡命した」といった説が一部の研究者の間でささやかれている。小野勝年氏はそれを「うがった説」「行き過ぎた解釈」として「軽々しくは同調できない」とコメントしている[9)]。わたくしもまったく同感である。

鑑真の伝記を丹念に読めば、「絶望」どころか、盛唐期を生きる人間によくみられる大唐気風を鑑真が持っていることがわかる。最後まで鑑真に付き添って来日した唐僧思託の『大唐鑑真伝』によれば、栄叡らの招請に対して、鑑真は「今、大唐の国家は道俗すべて大いに興隆している」と誇らかに語ったとある[10)]。この言葉からも、鑑真東渡の動機は「旧い世界に見切りをつけた」絶望による逃亡でなかったことが裏づけられる。

ふくまれている。

7）小野勝年「鑑真とその周辺」、『仏教芸術』第54号、1964年４月。

8）東山魁夷著『唐招提寺への道』、新潮選書、1977年２月、19頁。

9）小野勝年「鑑真伝とその周辺」、『日本絵巻大成16.東征伝絵巻』、中央公論社、1977年、93頁を参照。

10）『宋高僧伝』の鑑真伝に「宋思託は『東征伝』を著わし、詳しく述べる」とあり、また『招提千歳伝記』によれば、思託の『東征伝』三巻は広伝、淡海三船の『東征伝』一巻は略伝と呼ばれている。思託の『東征伝』は諸書に引かれた逸文によれば、正しくは『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』というが、本稿では『大唐鑑真伝』と略す。

「亡命説」よりも大胆なのは、鈴木治教授によって唱導される「スパイ説」である。鈴木氏によれば、日本が鑑真を招請したこと自体でっち上げだとし、唐王朝は「わが国勢を厳重監視のために」鑑真らを「工作部隊」として日本に送りこんだという[11)]。

鑑真派遣のきっかけについて、鈴木氏は日本と新羅の席次争いをあげて説明している。すなわち、この事件によって、唐王朝は警戒心を引き起こし、大使の藤原清河が人質として抑留され、鑑真をスパイとして日本に派遣するきっかけとなったと説かれる。

『唐大和上東征伝』によれば、鑑真は前後５回の渡航にことごとく失敗してから、大伴古麻呂の第二船に乗りこんで６回目の密航を決行し、いったん阿児奈波島（沖縄）にたどり着いたが、大使の第一船は逆風に吹かれて驩洲（ベトナム）へ流された。そうすると、唐朝派遣と鑑真密航、藤原抑留と沖縄到着との間に、大きな矛盾が生じるわけである。

鈴木治氏はこれらの事実を、「思託苦心の筋書」「東征伝のカラクリ」として一蹴してしまう。つまり６回の渡海というのは「白髪三千丈」の「子供だましの説」と片づけ、鑑真らが第一船から第二船へ乗りかえたのは、鑑真を日本に送りこみ、藤原を中国に差し止めるための唐王朝の謀略だったと主張する[12)]。

鈴木氏の著書では、玄昉も吉備真備もスパイ扱いにされているが、もし冒頭で触れた墓誌の主「井真成」が生きて帰国したとすれば、それもスパイ容疑をかけられない保証はまったくない。とにかく歴史を悲観的に扱いすぎたように思われる。ただし、よく考えれば、それも鑑真来日の動機に不可解な点が多すぎたところから生まれてきた憶測ということになるのではないか。

四、道教を崇めぬ国へ

それでは、鑑真渡日の動機をどう解けばよいのだろうか。わたくしがかねてより考えているのは、66歳で来日した鑑真を理解するために、日本史だけの視点からでは限界があり、むしろ中国史の背景にもっと目を向けるべきだと思うのである。また渡日の動機を、外面的な事象よりも、その内面世界に求めなければならないとも痛感してやまない。

こうして、鑑真の持つ内面の精神世界を視野に、これまでに「慧思転生信仰」や「舎利信仰」を切口に、鑑真来日の動機を考察したことがある[13)]。本節では、中国史とくに唐王朝を特徴づける仏教と道教の複雑な関係を考慮に入れて、鑑真来日の動機を探ってみたいと思う。

ここで注目すべきことは、天宝十二載（753）十月十五日、藤原清河らが揚州の延光寺に鑑真をおとずれ、唐王朝と交渉した結果を報告した記事である。つまり、玄宗皇帝は遣唐使の鑑真招請に対して、道士の同行を求めたが、藤原清河らは「日本の君王が道士の法を崇めない」ことを理由に、鑑真らをふ

11）鈴木治著『白村江 ── 敗戦始末記と薬師寺の謎 ──』、学生社、1975年７月、172頁。

12）鈴木治著『白村江 ── 敗戦始末記と薬師寺の謎 ──』、学生社、1975年７月。

13）王勇著『おん目の雫ぬぐはばや ── 鑑真和上新伝』、農文協、2002年12月。

くめて公式な唐人招請を取りさげたということである[14)]。

これまでに５回もの渡海に挫かれ、盲目となった鑑真にとって、また唐代の宗教事情からみれば「日本の君王が道士の法を崇めない」という言葉がつよく彼の鼓膜を振動させたことだろうと想像される。

そもそも唐の高祖（李淵）は即位すると、皇位の正当化をねらって老子（李耳）を先祖に奉り、道教を奨励した。太宗（李世民）のころ、儀式の場で道士と女冠を僧尼の前に位置づけ、名僧の智実や法琳らが激しく争った甲斐もなく、智実は杖打されて追い出され、法琳は益州（成都）へ流されて死んだ。

高宗の代になると、玄奘三蔵の出現によって、仏教の地位がやや回復され、儀式の場では、道士と僧侶とが東西にわかれて平行することになり、道教優位を宣揚する『老子化胡経』も破棄された。しかし、仏教が優位を取りもどしたのは、則天武后の治世を待たなければならなかった。『大雲経』を根拠にして、中国初の女帝となった武后は両京および各州に大雲寺を置き、仏教を道教のうえにランクさせた。長安元年（701）、天下各州に得度をゆるす勅令が下され、鑑真はまさにこの年に揚州の大雲寺で出家したのである。

神龍元年（705）正月、中宗（李顕）は武后の病弱に乗じて復帰し、国号を「周」から「唐」にもどし、道教の勢力を徐々に回復させた。しかし、中宗と叡宗（李旦）はまだ混乱期から抜けきれず、支配力を強めるために、律宗の名僧たとえば文綱・弘景・道岸らを優遇した。道岸が中宗から菩薩戒の師として宮中に招きいれられたとき、鑑真はそれに同行して上京し、弘景らより具足戒を受けたのである。

このように、鑑真が揚州で出家してから、洛陽と長安を遊学したころは、仏教とくに律宗の黄金期にあたるが、それも玄宗（李隆基）の治世（712～755年）になると、状況は大きく変わってくる。

国力富強を背景にした玄宗は高祖や太宗の故事にならって、「興道抑仏」の政策を採り、みずから『老子』を注釈し、家ごとに『道徳経』を備えるよう全国に命令を発した。開元二十九年（741）、両京および諸州に玄元皇帝廟と崇玄学を置き、生徒を配置して『老子』や『荘子』などを学ばせた。

栄叡らが長安を離れて揚州に下り、鑑真を日本に招請した天宝元年（742）のころ、玄宗はすでに道教の狂信者となり、『高僧伝三集』が玄宗を「玄牝に心を留め、未だに空門を重んぜず」と評しているのは、当時の実状によく合っている。

栄叡らの早期帰国、鑑真の東渡決意は、こうした唐の宗教事情と無関係ではない。鑑真らが渡航をつづけた12年間、玄宗の道教への傾斜はますますエスカレートしていた。果ては天宝十二載（753）、藤原清河らが鑑真招請を申し出たとき、道士の同行を条件づけたのである。

そこで、遣唐使らの「日本の君王が道士の法を崇めない」との一言、５回もの渡航失敗の辛労をなめ尽くし、盲目となった鑑真の心奥深くに響いたに違いない。社会全般に波紋を投げかけた道教と仏教の勢力消長が、江南仏教界の指導的な立場にある鑑真にも多大な影響を及ぼしたことは否めない。そして、それが鑑真来日の一因になったことも認めてよかろう[15)]。

14）真人元開『唐大和上東征伝』。

15）安藤更生は「彼らをして死に到らしめたり失明させたりした大原因は、実に未開異国への伝法の一事に尽きるのである」と述べ、道教要素を視野に入れていない。『鑑真』139頁。

五、道教の日本伝来

以上述べてきたように、鑑真は道教を日本にもたらさなかったどころか、道教の勢いに押されて来日した節さえある。こうなると、拙稿のタイトルを裏切る結論になってしまうようだが、しかしこのことを逆説的に捉えてみれば、仏教の道をひたすら歩んできた鑑真らをはみ出してしまうほど、唐王朝において道教文化は隆盛を極めていたことが明らかになる。そして、唐文化一辺倒の奈良時代に日本が道教文化を取り入れなかったという考え方はかえって不自然にみえる。

鑑真にしても、間接的ではあるが、道教の日本伝来に貢献していたことは認められる。その事例をいくつか挙げよう。

まずは、藤原清河らは玄宗皇帝に鑑真の招請を取り消したとき、「奏して春桃原ら四人を留めて道士の法を学ばせ」たことである。つまり遣唐使は4名の留学生を唐に残して道教を勉強させたのである。鑑真招請にともなって起こった事件である。春桃原ら4人の行方について、その後は記録に残っていないが、もし帰国したならば、本格的な道教の教学や儀式または典籍などを日本に伝えたのだろう。

また、来日後の鑑真は自らの死に方について「坐亡するよう」遺言を残している。インドに留学した経験をもつ玄奘三蔵がつよく望んでいた仏教式の火葬を、鑑真は実行しようとしなかった。「坐亡」とは肉体の不死を重んずる道教的な発想と無関係ではないように思われる。

さらに、鑑真の弟子である思託はその著『延暦僧録』の自叙伝において「俗姓は王氏、瑯琊王仙人王喬の後なり」と名乗っているし、慧思が骨を埋めた衡山は神仙的な雰囲気に包まれた霊山として描かれている。中国の慧思託生説と日本の太子信仰とを融合させて「聖徳太子慧思後身説」を作りあげた鑑真僧団が唐文化の底流をなす道教的な教養や知識を身につけ、それを日本にもたらしたことは想像に難くない。

このように、鑑真らは意識的に道教を日本に広めようとしたことはなくても、だからと言って、唐文化の一部として身についていた道教的な文化を日本に伝えなかったとは言い切れない。

冒頭で泰山府君のことに少し触れてみた。道教的な色に彩られた泰山府君の日本伝来について、井真成と同時に入唐し、鑑真と同じく玄宗時代を生きていた阿部仲麻呂と吉備真備とがそれにかかわっている伝承がある。つまり、泰山府君を日本に伝えたかった阿倍仲麻呂は帰国を許されなかったので、同学の吉備真備に託した。それがのちに今が流行の安倍晴明に受けつがれたという。

これは伝説に過ぎないだろうが、しかし泰山府君はなんらかの形で、唐代のころ日本に伝わった可能性が高い。比叡山の赤山禅院に祭られている赤山大明神は泰山府君に擬せられ、入唐僧円仁により唐から伝えられたという。

泰山府君の伝来ルートについてまだ不明な点があるものの、それが日本文化に深く浸透していたことは疑われない。

たとえば、『吾妻鏡』をひもとくと、御所や幕府で「七座の泰山府君祭」がしばしば執り行われていることがわかる。また明治以前の天皇や将軍の即位式に行なわれる「天曹地府祭」も泰山府君とかかわりが深い。祭壇に祭られる十二神は天曹具官・地府具官・水官具官・北帝大王具官・五道大王具官・泰山府君冥官・司命君冥官・司禄君具官・六曹判官具官・南斗好星君具官・北斗七星君・家親文人の霊と

あって、これらはすべて道教の神々である[16)]。

泰山府君にまつわる信仰は、為政者の儀式に取り入れられたのみならず、民間にも広がっていた模様である。その端的な例は人口に膾炙する能の「泰山府君」にほかならない。桜好きの中納言藤原成範は、屋敷の四方に吉野の桜を移し植え、人々から桜町中納言と呼ばれた。中納言は７日間という無常な桜の短い命を惜しみ、泰山府君の祭を営み、桜の花の命を延ばそうと祈願した。そのとき、天上より天女が降り立ち、花の美しさに見惚れ、つい一枝を手折り、羽衣の袖に隠して昇天していく。祭の場に泰山府君が姿を現し、天女を天上から呼び下し、盗んだ花の枝をもとの木に戻させ、花の命を21日間に延ばしたという。

泰山府君の伝来とかかわったと見られる円仁は在唐中、唐人から日本に道士がいたかどうかを聞かれ、「道士はいない」と答えた[17)]。それと藤原清河が鑑真に語った「日本の君王が道士の法を崇めない」という事情をあわせて考えると、施設や官職そして組織をもつ教団としての唐代道教が日本に取り入れられた確証はないが、儀式や民間信仰そして年中行事などに混じった唐文化としての道教的なものは、遣唐使時代にはさまざまなルートによって、日本にもたらされたと見るべきであろう。

付記：本稿は2004年11月に杭州で開催された「道教と日本文化」国際シンポジウムにおいて行なった基調講演に基づいて改稿したものである。その一ヶ月前に西安で見つかった井真成墓誌がマスコミを賑わしていた事情もあって、冒頭でその墓誌に触れた。必ずしも本稿の主旨と密接にかかわらない部分であるので、改稿時に削除も考えたが、やはり旧を存することにした。講演時にコメンテーターをしてくださった後藤昭雄教授より貴重な助言をいただき、また後日に道教研究の権威である窪徳忠教授より叱責の書簡を賜わったこと、ここに記して謝意を表したい。

16）黒岩重人「宗教としての陰陽道 ── 陰陽道の即位儀礼、天曹地府祭 ── 」、『日本宗教総覧93』、新人物往来社、1993年４月。

17）円仁『入唐求法巡礼行記』巻一。